

乳 癌 の 腸 管 転 移 に つ い て

昭和40年9月27日 受付

信州大学医学部 丸田外科教室

椎 名 康 之 広 瀬 義 明 菅 谷 晴 彦

Intestinal Metastasis from Carcinoma of the Breast

Yasuyuki Shiina, Yoshiaki Hirose and Haruhiko Sugeno

Prof. Maruta's Surgical Clinic, Shinshu University

緒 言

乳癌は血行性に遠隔転移を来しやすい疾患の一つとされているが、腸管へ転移を生じ、胃腸症状を訴えて再発することは極めて稀である。我々は最近乳癌根治手術後、長年月を経たのち、腸管に転移を生じ胃腸症状をもつて再発した2例を経験したので報告する。

症 例

症例1 田こち〇え, 59才, 女性,

家族歴: 両親が脳出血にて死亡。夫が胃癌にて死亡。

既往歴: 48才の時イレウスにて某病院で腸切除術を受けた。

主訴: 腹部の鈍痛及び下痢。

現病歴: 1959年右乳腺の腫瘤に気づき乳癌として某病院にて根治手術を受け、その後経過良好であつた。1962年8月頃より腹部の鈍痛及び下痢が現われ、9月には全身倦怠、るいそう等が著明となつたので、9月15日丸田外科へ入院した。

入院時所見: 体格小、栄養不良、顔貌やや苦悶状、眼瞼結膜に貧血を認め、右胸部に乳癌の手術創瘢痕を認める。腹部所見として臍部に手拳大で横に長い境界鮮鋭、表面凹凸不平の硬い腫瘤を触知した。一方右側の鎖骨上窩及び腋窩に示指頭大から拇指頭大の表面凹凸不平の硬い腫瘤を数コ触れた。

検査成績: 赤血球364万、血色素78% (ザリー), 白血球3500、血沈1時間値16mm、尿には異常所見を認めないが、糞便の潜血反応(+)である。X線検査所見では、胃・十二指腸に異常なく、横行結腸に陰影欠損を認め(写真1)、これに一致して腫瘤を触れた。

入院後の経過: 乳癌のリンパ節転移及び横行結腸癌の疑いとして、1962年9月20日まずリンパ節転移の廓清を行なつた。ところが術後5日目頃より腹痛、腹部膨満感及び腰痛が現われ、8日目イレウス症状が現われたので開腹した。

手術所見: 腹腔内には黄色透明の腹水が1200cc貯溜し、横行結腸に細長い癌腫瘤を認め、これによるイレウスと判明した。しかし癌性腹膜炎と肝転移を伴っていたので、回腸結腸吻合と腫瘤の試験切除のみを施行した。術後はイレウス症状もとれ15日目退院した。

組織学的所見: リンパ節転移の組織像(写真2)は、軽度の間質線維の増生する間に異形の著しい、やや小型の癌細胞が索状に発育して、リンパ節の殆んど全体を置換している。横行結腸の腫瘤の組織像(写真3)では、癌が漿膜面に発育しやや大きい蜂巣を形成する所もみられるが、細胞の形状、間質の状況は前者と全く同じで、乳癌に由来した硬癌性の未分化癌と考えられる。

症例2 竹〇い〇子, 69才, 女性,

家族歴: 長女が胃癌に罹患した以外に特記すべきことはない。

既往歴: 26才の時妊娠腎、左急性化膿性乳腺炎、左湿性胸膜炎に罹患、3才の時左子宮付属器炎に罹患した。

主訴: 粘血便及び腹部膨満感。

現病歴: 1952年7月左乳腺に示指頭大の腫瘤があるのに気づいたが、放置していたところ次第に増大して鶏卵大となつたので、1953年7月左乳癌として丸田外科で根治手術を受け、その後経過良好であつた。ところが11年後の1964年1月末より、粘血便を排出し、糞柱も細くなり、腹部膨満感、食欲不振、るいそう、全身倦怠、めまい等も現われて来たので、1964年3月6日丸田外科へ入院した。

入院時所見: 体格中等度、栄養不良、顔面蒼白で眼瞼結膜は貧血性、左胸部に乳癌の手術創瘢痕を認める。左鎖骨上窩に示指頭大で、移動性のない硬い腫瘤を触れ、腹部は全体に膨隆し、鼓腸を認め、右悸肋部に圧痛のある腫瘤を触れたが、他には腫瘤は触れない。

検査成績: 赤血球394万、血色素72% (ザリー), ヘマトクリット33%, 白血球4900、尿には異常所見を

認めないが、糞便は時に粘液及び新鮮血を混じっていた。血清蛋白は 5.6 g/dl で低値を示し、肝機能検査では総コレステロール 210 mg/dl , A1 フォスファターゼ 42 k.u. とやや高値を示す以外は正常。注腸バリウム透視では、S字状結腸に陰影欠損を認め(写真4)、直腸鏡検査で肛門より12cmの部に狭窄を認めた。

以上の所見より、乳癌の鎖骨上窩リンパ節転移及びS字状結腸癌と診断した。

入院後の経過：入院後も便秘、腹部膨満、鼓腸等腸狭窄症状が著明で、浚腸によらず排便がなかった。

3月9日左鎖骨上窩リンパ節の副切除施行、腫縮は示指頭大で硬く、総動脈に接し、周囲組織と軽く癒着していた。S字状結腸の腫縮に対しても手術を行なう予定であったが、4月14日右癌性胸膜炎を併発し、血性の胸水の貯留が著しく(写真5)、呼吸困難も増強し5月19日死亡した。

剖検所見：

1. 腹膜癌症
2. 胸膜癌症
3. 転移：肝表面、右卵巣、直腸及びS字状結腸、腸間膜リンパ節、肺(主として胸膜下)

腹腔には淡黄色、透明の腹水600ccを認め、S字状結腸は殆んど全長にわたり内腔が閉鎖状態となり小腸及び周囲組織と癒着し、癌性腹膜炎を起し、特に肝の表面及びこれに接する横隔膜の転移が著明で、そのため横隔膜は肥厚して板状硬となっている。右胸腔内には黄色透明の胸水1000ccを貯留し、胸膜の全面に粟粒大～小豆大で一部癒合性の灰白色の硬い結節が無数に存在し、癌性胸膜炎の像を呈していた。左胸腔にも淡黄色、透明の胸水200ccを認め、横断面に著明な転移巣を認めた。

組織学的所見：11年前に切除した左乳腺の原発腫瘍は、小葉癌(写真6)で、腺様構造は明らかでなく、一部で周囲組織内へ浸潤発育し、リンパ管を侵す所見もみられる。今回切除した左鎖骨上窩のリンパ節転移(写真7)は、細胞の異型性は前者に比べてかなり強くなっており、著しい反応性増殖を示す間質の中に、癌細胞が発育している所見が見られる。S字状結腸(写真8)においても、癌細胞が間質、リンパ管内を広く浸潤発育し、粘膜から漿膜に至る腸管の全層を等しく侵しており、その異型性は原発腫瘍に較べて強くなっているが、形状の似ている点から、乳癌の腸管転移と推定される。

以上の所見より本例は乳癌がS字状結腸、及び直腸、胸膜、肝、卵巣、腸間膜リンパ節等全身に広汎な転移を来した症例であることが判明した。

考 按

一般に乳癌の術後再発は、鎖骨上窩、腋窩、前胸部等の局所再発が最も多く、その他全身の殆んどすべての臓器に遠隔転移を来す。鬼塚^①は乳癌患者210例の術後再発及び転移について検討し、手術側の局所再発が59%で、そのうち鎖骨上窩が最も多く、前胸部、腋窩、頸部の順で、鎖骨下窩は少ないと述べ、反対側でも鎖骨上窩が多く、次いで腋窩、乳房、頸部の順で、遠隔転移では、肺と骨の転移が最も多く、次いで胸膜、縦隔(胸骨線を含む)の順であつたと報告している。藤森^②は乳癌根治手術後の再発は、局所よりも遠隔臓器に転移する傾向があり、肺、肝、骨に高率におこると述べているが、胃腸管転移例については述べていない。

剖検例における遠隔転移は、表1の如く骨、肺、肝、胸膜に多く見られるが、腸管転移は比較的少なく、Sprout^③は18%に、Abrams^④は14.4%に認めているが、Walther^⑤は2.7%に認めているに過ぎず、Warrenら^⑥は全くこれを認めていない。しかしGrahamら^⑦は開腹手術或いは剖検によつて確かめ得た乳癌75例中25例に胃腸管転移を認め、乳癌の胃腸管転移はそれほど稀でないと述べている。

表1 乳癌剖検例の遠隔転移

		Sprout (1955)	Abrams (1950)	Walther (1948)
		100例	167例	182例
骨	骨	71%	73.1%	47.6%
	肺	69	77.2	62.6
	肝	66	61.1	35.1
胸	膜	51	64.7	
	副	49	53.9	8.2
	皮	30	18.6	0.5
甲	状	24	5.4	7.1
	腺	22	28.8	5.4
	脳	20	23.4	3.9
卵	巢	19	35.3	
	心	18	14.4	2.7
	胃	17	12.6	8.2
胃	腸	17	13.8	3.2
	腎	17	16.8	2.7
	脾	15	8.4	2.2
子	宮	13	24.6	
	腹	11	24.6	
	膜	11	8.4	
横	隔			
	膜			
	心			

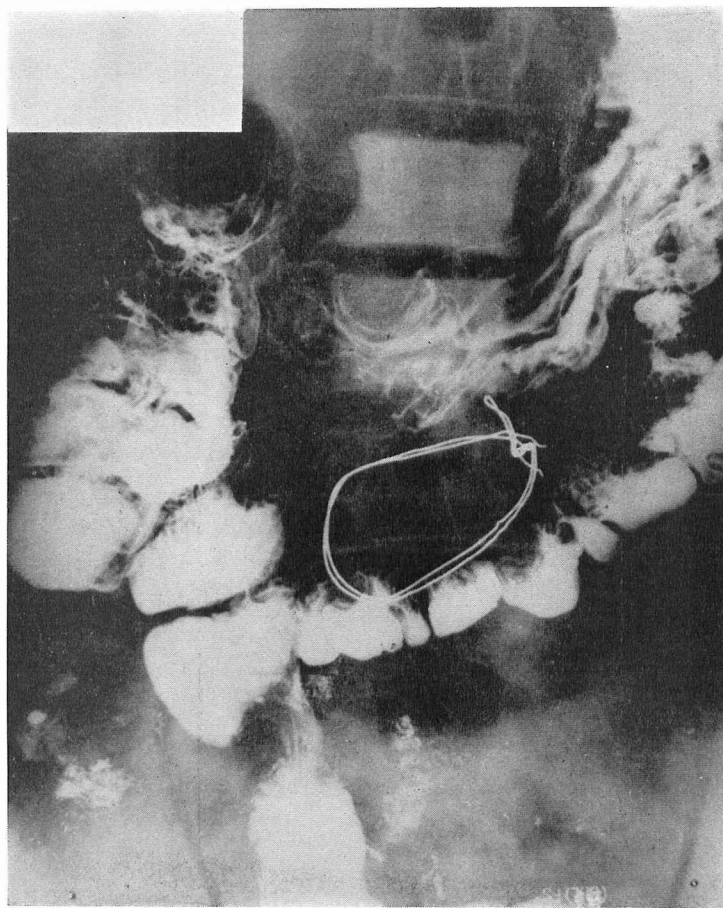


写真 1

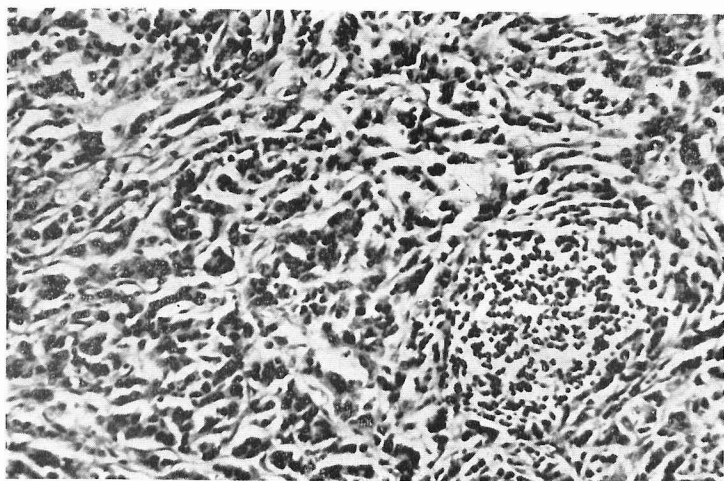


写真 2

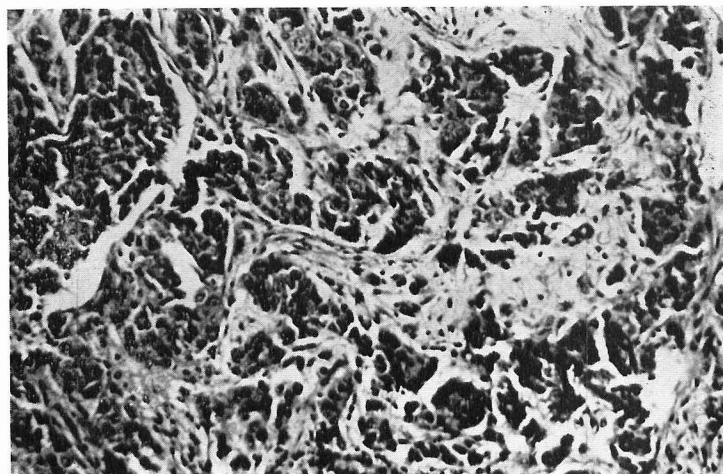


写真 3



写真 4

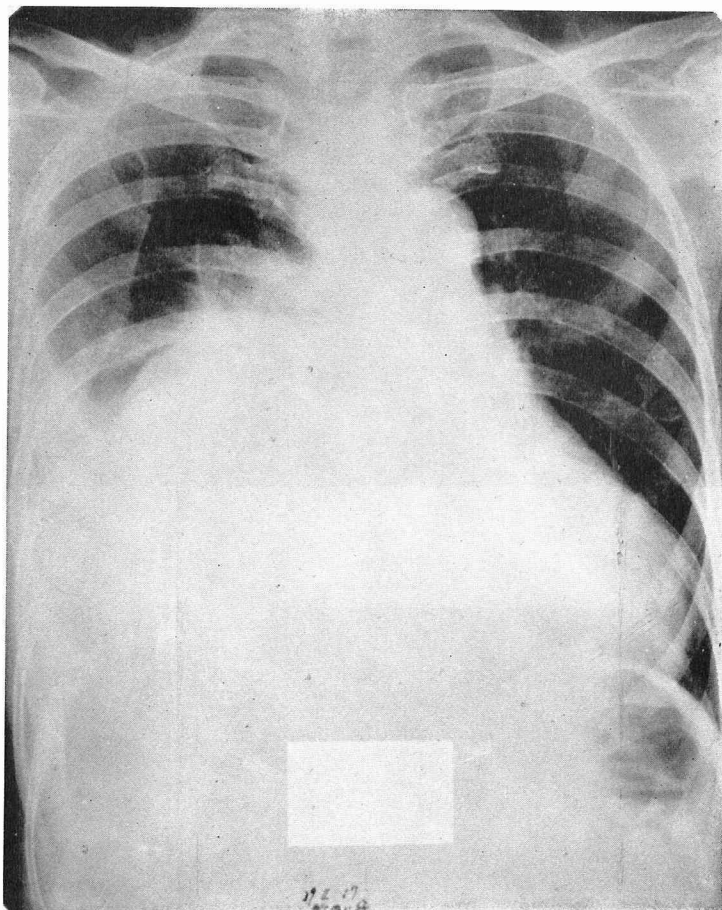


写真 5

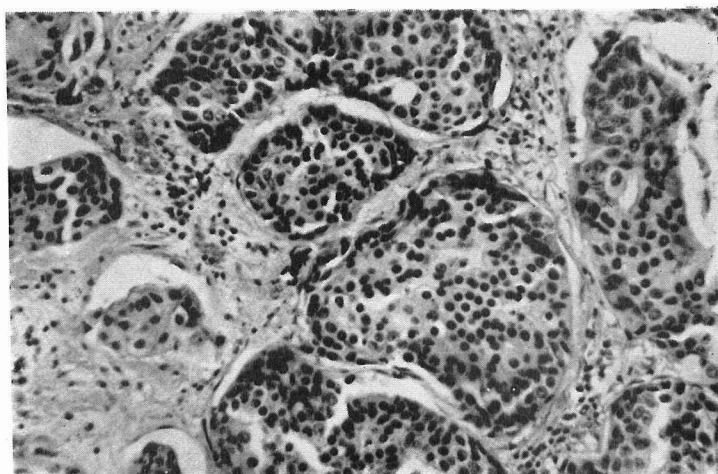


写真 6

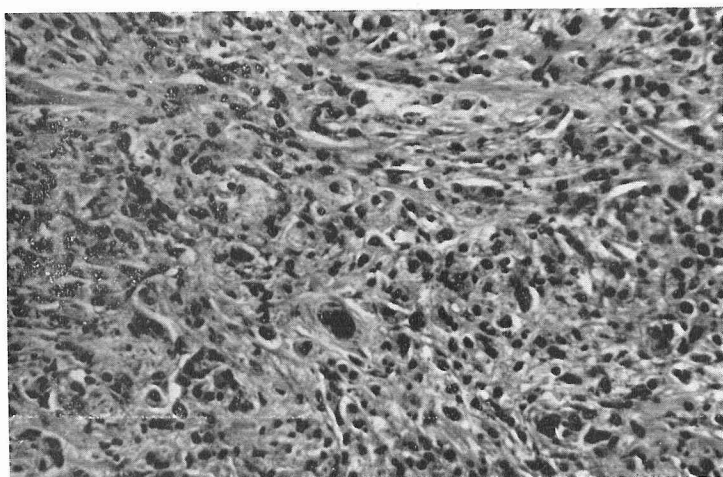


写真 7

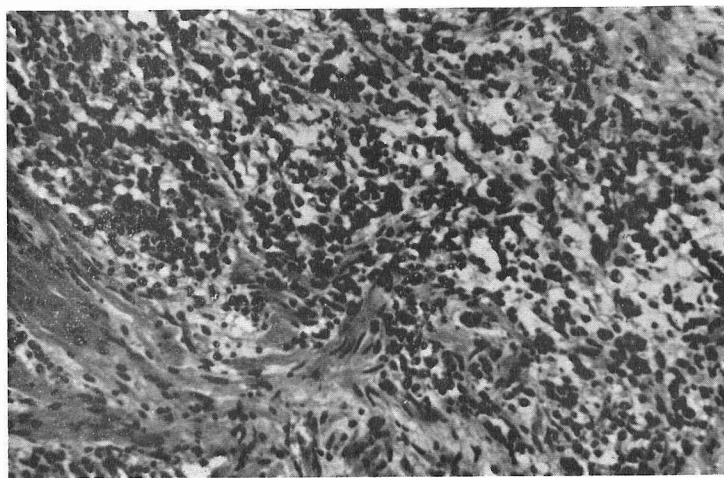


写真 8

本邦に於ては森ら^⑧は悪性腫瘍の剖検例 719 例の臓器転移について検討し、乳癌 13 例中小腸転移 2 例、結腸転移 1 例を報告し、林^⑨は全身に広汎な転移を来した乳癌で、胃、回腸、盲腸、下行結腸等に転移を認めた 1 例を報告している。

このように剖検例における胃腸管転移の頻度は、報告者によつてかなりの相違がみられるが一般的には少ないものである。

我々の症例で乳癌が腸管に転移を生じた径路について検討してみると、症例 2 では、血行性に転移を来しやすい骨、肺、肝実質等には転移がみられず、胸膜肝表面、腹膜等に転移が認められたことから、乳癌がまず所属リンパ節転移を生じ、ついでこれが胸膜に達し、更に腹膜に及んで癌性腹膜炎を生じ、播種状に腸管へ転移を生じたものと推測される。たゞし症例 1 は剖検を行なつていないので詳細は不明であるが、癌性腹膜炎を伴つていた点及び横行結腸の転移は漿膜面より発育している点から考えて、本例の横行結腸転移も癌性腹膜炎から生じたものと推測される。

いずれにしても乳癌が術後胃腸症状をもつて再発することは稀であつて、著者らの症例も臨床的には横行結腸癌或いは S 字状結腸癌と診断され、一時は重複癌と考えられたものである。Bacon ら^⑩も直腸癌を思ひ合わせた乳癌の直腸転移の 2 例を報告し、かかる転移のあることを警告している。

また Gögl ら^⑪によれば局所的には治癒と考えられる症例でも、数年乃至 10 数年の潜伏期を経て他臓器に癌の再発することがあると述べているが、我々の症例 1 は乳癌根治手術 3 年後に横行結腸に、症例 2 は根治手術 11 年後に S 字状結腸に再発したものである。

結 語

著者らは最近乳癌の腸管転移の 2 例を経験したので、これら症例について考察を加えて報告した。

(剖検及び組織学的所見について御教示を頂いた中央検査部丸山講師ならびに第二病理学教室田口学士に深謝する。)

文 献

- ①鬼塚忠一郎：日本医放会誌，21：634，昭36
- ②藤森正雄：日本臨床，20：11，2090，1962
- ③Sproul：藤森正雄：日本臨床，20：11，P2094，東京，1962より引用
- ④Abrams, H. L., et al.: Cancer, 3: 74, 1950
- ⑤Walther, H. E.: Krebsmetastasen, P 473, Basel, 1948
- ⑥Warren, S., et al.: Surg., Gynec. & Obst., 57: 81, 1933
- ⑦Graham, W. P., et al.: Ann, Surg., 159: 3, 477, 1964
- ⑧森亘，等：癌の臨，9：7，351，1963
- ⑨林武彦：日医大誌，18：5，513，1951
- ⑩Bacon, H. E., et al.: Cutler, M.: Tumor of the Breast, P142, Philadelphia and Montreal, 1962より引用
- ⑪Gögl, H., et al.: Kaufmann's Lehrbuch der speziellen Pathologischen Anatomie, II/2, 395, 1958

ABSTRACT

It is well known that carcinoma of the breast frequently develops distant metastasis. However, metastasis to the intestinal tract from carcinoma of the breast with gastro-intestinal symptoms is not so common.

Here we reported 2 cases with metastasis to the intestinal tract. One of them was 59 years old female who had metastasis to the transverse colon with abdominal pain and diarrhoea 3 years after mastectomy.

The other was 69 years old female who had metastasis to the sigmoid colon with constipation, meteorism and melena 11 years after radical operation.